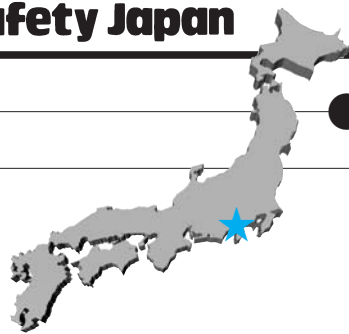


地域のチカラ

●伊豆スカイライン・ライダー事故・ゼロ作戦



伊豆スカイラインを利用するライダーへの安全運転啓発



「伊豆スカイライン・ライダー事故・ゼロ作戦」には毎回100名以上のライダーが集まる

「伊豆スカイライン」は、静岡県の伊豆半島の尾根を約40km縦走する(熱海峠・天城高原) 観光道路である。日本でも有数のツーリングスポットで、ライダーたちの人気も高い。その一方で、二輪車の交通事故が多かったため、大仁警察署(静岡県伊豆の国市)と静岡県交通安全協会大仁地区支部は、平成21年11月から「伊豆スカイライン・ライダー事故・ゼロ作戦」を展開している。

静岡県交通安全協会大仁地区支部事務局長の内山信行さんは「伊豆スカイラインにおける二輪車の事故は懸案でした。さらに平成21年11月から、通行料金を全車種上限2000円とする社会実験の実施も決まっていたため、交通量の増加とともに事故件数の増加も懸念されていました。二輪車の事故を減らすため、利用するライダーに安全を呼びかける必要があると思ったわけです」と、当時は振り返る。

ライダーへの啓発を行う講師を、元プロレーサーで二輪ジャーナリストである宮城光さんに依頼した。安全がいかに重要か、宮城さんからライダーたちに語ってもらうためだ。宮城さんから引き受けるにあたって、出された条件は、ただ1つ。それは「一回限りのイベントで終わらせてほしくない」ということだった。

平成21年11月3日に「伊豆スカイライン・ライダー事故・ゼロ作戦」の第1回目が開催された。イベント会場となったスカイポート亀石では、宮城さんの安全運転講話、大仁警察署員による伊豆スカイラインの事故発生状況の説明、静岡県警の白バイ隊員による安全指導などが行われた。



静岡県交通安全協会大仁地区支部事務局長の内山信行さん



第1回目からライダーへの安全運転講話を担当している宮城光さん

5回目を迎え、内容も進化

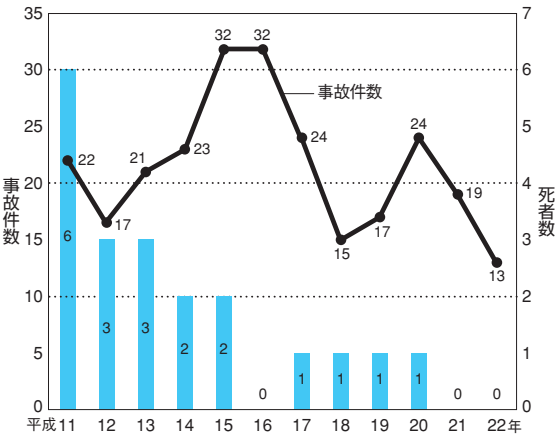
この作戦は昨年11月7日で5回目を迎えた。会場を日本サイクルスポーツセンター(静岡県伊豆市)に移し、講習の内容も充実させたという。

「従来の内容に加えて、スラロームができるようなコースを設けて、簡単なライディングスクールができるようにしました。伊豆スカイラインでは、野生の鹿が道路に飛び出してくることがあるので、そうした状況を想定した講習も行いました。」

毎回、告知は大仁警察署のホームページだが、いつも100名以上のライダーが会場に集まるそうだ。

「参加したライダーがクチコミで広がっているのだと思います。最近では栃木県や長野県から駆けつけてくれる方もいます。次の課題は、バイクは好きだけど、こうしたことに興味がないライダーの取り込みです。幅広いライダーに参加してもらえないようにしながら、継続していきたい」と、内山さんは今

伊豆スカイラインにおける二輪車事故発生状況



後を見据える。伊豆スカイラインの二輪車の交通量は社会実験を開始後、約2割増えているが(平成22年12月末時点・静岡県道路公社調べ)、大仁警察署によれば、伊豆スカイラインにおける平成22年の二輪車の事故件数はピーク時の32件から13件にまで低下し、死者数はゼロとなっている。この作戦の効果が着実に現れているといえそうだ。



昨年11月の第5回目には簡単なライディングスクールも行った



会場では二輪・四輪のシミュレーターを使って安全運転トレーニングも実施(本田技研工業(株)安全運転普及本部浜松普及ブロック提供)



参加ライダーにはオリジナルのステッカーが配布される

熊本県とHondaによる次世代パーソナルモビリティの実証実験計画



2010年8月に熊本県とHondaで締結した「次世代パーソナルモビリティの実証実験に関する包括協定」(協定期間:2010年8月~2013年3月)は、Hondaの二輪車・四輪車・汎用製品の電動化技術や、情報通信技術、太陽光発電によるエネルギー供給設備などを用い、熊本県と共同で、将来の低炭素化社会の実現や県民の生活の質(QOL*)向上に向けて、実際の都市交通環境下で実証実験を行うことを目的としている。この協定に基づき、10月より「熊本市」と共同で電動カート「モンパ」による実証実験を開始。さらに今後、「水俣市」「阿蘇エリア」「天草エリア」においても、将来の低炭素モビリティ社会実現に向けた効果検証を行う予定である。

実証実験の内容

熊本県、関係市町村、熊本県工業連合会、熊本大学、九州電力、Hondaが共同で新たに設立した「次世代パーソナルモビリティ推進委員会」の中で、地域社会における県民のQOL向上に貢献できる次世代パーソナルモビリティのあり方の検証や、各電動車両が普及するための地域や用途の検証を行っていく。

*QOL (Quality of Life=クオリティ・オブ・ライフ):人がどれだけ人間らしい生活を送り、物理的のみならず、精神的な豊かさや幸福を感じているかを尺度としてとらえる考え方。

地域	実証実験の内容
熊本市	<ul style="list-style-type: none"> ○高齢者施設での「モンパ」の共同利用などによるQOL定量評価検証。 ・中心市街地に近接する高齢者集合住宅の入居者を対象とした共同利用。 ・熊本市郊外の健康福祉センターに通う高齢者を対象としたパーソナルユース。 ・高齢者総合施設のケアハウス入居者や通所サービスに通う高齢者などを対象とした短期レンタル。 ○市民や観光客へのレンタルなどによる「EV-neo」を用いた移動利便性の検証や、高校生の通学利用による若年層への電動化モビリティの浸透。 ○県施設への充電ステーション設置に向け、EV利用における施設ロケーションの最適化の検証。
水俣市	市民や観光客へのレンタルなどによる「EV-neo」を用いた移動利便性の検証や、県施設への充電ステーション設置に向けた最適なロケーションの検証。
阿蘇エリア	観光客へのレンタルによるプラグインハイブリッド車や「EV-neo」を用いた移動利便性の創出と移動利便性の検証。
天草エリア	島内利用による地域の足として、EVを用いた移動利便性の検証。

実証実験車両

実証実験では、走行中にCO₂を一切排出しないEVや電動二輪車、電動カートに加え、エンジンと2つの高出力モーターを組み合わせたプラグインハイブリッド車を使用。



電気自動車 (EV)
取り回しのよいコンパクトボディの「フィット」をベースに、燃料電池電気自動車「FCXクラリティ」で培った同軸モーターなどの電動化技術と、東芝製のリチウムイオンバッテリーを搭載。充電時間は200V電源で6時間以下、航続走行距離は160km以上。



プラグインハイブリッド車
中型セダン「インスパイア」をベースに、専用開発した高効率・低燃費エンジンと2つの高出力モーターを組み合わせ、「モーター走行」「ハイブリッド走行」「エンジン走行」の3つのモードでの走行が可能。また、ブルーエナジー製のリチウムイオンバッテリーを搭載し、EV走行で15kmから25kmの航続走行距離を実現。



電動二輪車 (EV-neo)
昨年12月より配達業務などを行う企業や個人事業主向けにリース販売を開始した、スクータータイプの電動二輪車「EV-neo」を使用。1回の充電あたりの走行距離は34km(30km/h定地走行テスト値)を実現。



電動カート (モンパ ML200)
2006年に発売した快適な乗り心地と高い操縦安定性、安心して気軽に乗れるスタイリッシュな電動カート「モンパ ML200」に、操作・走行データ記録機器を装着したモデルを使用。1回の充電で約25km/h(6km/h、平坦路)の連続走行を可能としている。